

春燈

7 月号

July 2011



主宰の句

安立公彦

母の日の妻に白寿の母ある幸

駆け抜くる子らの上とぶ夏燕

葉桜を仰ぐも旅の愁ひかな

夏風邪や身体髪膚他人めき

葛桜切子の皿にひとを待つ



成瀬櫻桃子の句

秩父夜祭ちつとべ酔のまはりけり

『素心』昭和四十九年

埼玉県秩父神社例大祭の夜祭、クライマックスは十二月三日。賑やかな秩父囃子の屋台が市内を曳き回されるのを沿道で見物。時期も時期、寒いこと寒いこと。掲句の生まれた折の同行者が当時「春燈」の作家で故村野重雄氏。「ちつとべ酔つ払った」と呟いた。こ耳に聞き、すかさず句に仕立てたとの事。「ちつとべ」は方言で少しの意。巧みに方言を使い夜祭の詩情をかもし出した。

植田利一

成瀬櫻桃子の句

雨男万太郎忌や菖蒲に雨

『成瀬櫻桃子俳句選集』平成二十二年

櫻桃子俳句には忌の句が多い。わけても万太郎忌の句が多い。櫻桃子の万太郎師に抱く思いの深さが犇々と心に滲みてくる。不肖私が「春燈」に投句しはじめた昭和三十年頃は万太郎選であった。最後の方に一句記された我が句を見て胸がふるえた。隅田川の辺に住まいしていた頃である。選集には〈雨一粒二粒三粒傘雨の忌〉もある。今、在住の秋田にも三粒ほどの雨が降っている。

見田英子

燈下集



○ 吉澤恵美子

遠き日の母とつきたる紙風船
みちのくの空の重たし鳥雲に
満開のさくらの下にゐて黙す
流されて屋根に漁船や亀の鳴く
被災地の希望一樹のさくら咲く

○ 卜部黎子

初蝶来遠海鳴をいぶかしみ
柳絮とぶ石に石積む祈りかな
鎮魂のかたかごそそと吹かれをり
花種蒔く一粒づつに明日託し
平積みの本の凸凹弥生尽

○ 卯木堯子

花水木からはなみづきまでの道
雀隠れ軽くなりたる西の空
石塔の倒れしままや花吹雪
誘はれず誘はず夜のさくらかな
いつしかに駅の暗さに慣れて初夏

日に一話奇縁まんだら読む四月
言ひ訳の想定外や座禪草
松露搔誰が名付けしマリア山
夜桜や母の造りし密造酒
海鳴の脳裡に還る糸線草

○ 深川敏子

青空にぶつかり風の光りけり
花冷や尾崎記念館に鳩の住む
ファンファールのやうに咲き初む花水木
子どもの日焼き立てピザの届けけり
この地球に震へ止まらず春夕焼

○ 和田幸江

植物園尺余の蜂の巣を成せり
二の丸へさくら吹雪の押し寄する
子猫にも運不運ある甘え鳴き
春落葉ことばのごとく肩に降る
さくらさくら吉野の里の和紙工房

○ 大室恵美子

対岸へ行く橋遠し蘆の角
不覚にも王手かけらる目借時
流木は二人のベンチ春惜しむ
みちのくの濤荒るる日や鳥帰る
みんな皆元気出してと鯉幟

○ 尾野奈津子

空に鳥地に満目の麦青む
桜散る枝のあはひに昼の月
合唱の手拍子蝌蚪の生まれけり
大仏の足のしびれや山笑ふ
一周忌大き春月拝しけり

○ 寺村年明

背伸びしても届かぬ書棚春うらら
だみごゑで鳥の囓ふ養花天
就職の決まりたる子と青き踏む
ローマ字に替ふる門札花水木
シナリオのなき人生や浮いてこい

○ 小嶋恵美

春光の島を出る子に父が添ふ
波跡に春愁の歩を重ねけり
八重桜雲の上ゆく魂のこゑ
海に向き停む人や月朧
復興の槌音春の研かな



当月集

安立 公彦選



○ 矢口 笑子

縛れやすきパソコンコード四月馬鹿

天心に触れて失速紙鳶

気持ち良く騙されてをり春の夢

ひらめきの疎かならず蜂光る

駅前の進学塾や鯉幟

○ 川崎 真樹子

子育てに王道はなし粽解く

初夏やライ麦パンの酸味ほのか

人の背に翼の名残り新樹燃ゆ

万緑やパワーショベルの咆哮す

嘘泣きの通じぬ母の単帯

○ 篠原 幸子

夕桜スカイツリーをなじませて

柔らかく灯して遡上花見船

いつになく耳なつかしき燕かな

どうだんの鎮魂の鈴ゆれやます

春陰や胸に秘めたる「アヴェ・マリア」

○ 藤原 若菜

朧夜の火傷の指を冷やしけり

墨東へ向かふ車窓や花曇

椿寿忌や携帯に着くフォト俳句

逆さまの天地弾くるしやぼん玉

野苺やひとりの想ひ凝らす径

○ 小山 繁子

児の声の消えしげんげ田盛りかな

故郷へ続く空なり初燕

被災者を問ふ旧校舎花は葉に

葉桜や礼節守る陸奥の人

若葉風母はかはらぬ国訛

春燈の句

安立 公彦選



古陶器の肌の汚れや春愁

千葉 金森 涼

行く春や鳴かぬ鳥が電柱に

ぼうたんに傘さす雨やたかしの忌
農人の口笛サンバ麦を刈る

戦災も天災も生き昭和の日

牡丹の香のやさしさよ花の冴え

生も良し死も又宜ししやぼん玉

吾母につくさず母の日暮れゆけり

橋三つ越ゆれば海ぞ赤穂霞む

兵庫 和田 絢子

雪柳たわみの先は播磨灘

みどりの日子供と墓参若葉路
災害が災害を生み鯉幟

黄蝶遅刻フェンスをくぐり校庭へ

花の歌いくつかあれど隅田川

東京 小俣 剛哉

妣のこと頻りに想ふ花月夜

千本の桜見てをり昼の席

首落ちし石仏一つ春の闇

長野 木内 博一

田起しのエンジン始動浅間晴

唐橋を渡り暮春の阿弥陀堂

初蝶や起こせし土に口づけす

行く春の犬吠埼に夢二の碑

京都 山下 朝香

熱気球五月の空を波立たす

手毬唄春潮ひがな浜に寄す

振返り余花の香りをたしかむる

千葉 神田 恵琳

ピオロンの洩るる枝折戸五月闇

丸き背や一衣一鉢あたたかし（良寛像）
こだはりを捨てて生きたや春の風

余言

安立公彦

混沌に父母亡き安堵鳥雲に

鷹崎由未子

東日本大震災から八十日近い時が過ぎようとしている。死亡二万五千余人、行方不明八千七百人、避難している人は実に十万人にも及ぶという。

且下、新聞テレビのニュースは東電福島原発事故に集中している。これはすでに日本という一国の問題を越えて、世界中が負うべき重いテーマとなっている。

翻って津波の被災地は、営々と復興への道を歩み続けている。その気力には頭が下がる。予断を許さない、まさに混沌とした趨勢の中にあつて、作者は父母がこの大災害を知らず亡くなっていることに改めて安堵の思いを抱く。それは同時に被災した死者への鎮魂の思いでもある。

亡き人と共に座らん花筵

鈴木 直充

「陸奥よ」の前書がある。花見の宴にともに座ろうと呼びかけているのは、大震災で亡くなった人である。

こういう災害を詠むのは、俳句よりむしろ短歌の方がふさわしい。言葉尽くさなくては自分の思いが他者に伝わらないという危惧は、十七文字で表現する俳句には常に付きまとう。それを補うのが、省略と表現法である。

この句、「亡き人と」と主人公を上五に置き、一句の情況を明示する。句を見る人は、前書きと共に、それが大震災で犠牲になった人と認識する。場面は被災地を見下ろす里山の花の下か。「花筵」が却つて一句に漂う静寂さと、故人を偲ぶ思いを深くする。

いつしかに駅の暗さに慣れて初夏

近藤 牧男

東電福島原発事故は、計画停電という事態に立ち至り産業、生活の大混乱を引き起こした。私のところも三回の停電に遭つた。五月現在停電は回避されているが、盛夏になると免れ難い。

しかし駅の照明の落ちるのはいいとして、間引き運転を当然のこととする一部私鉄の在り方には納得出来ない。大義名分が一人歩きをしているようなものだ。

この句、そういう公憤を素直に受け、駅の暗さを受け入れている市民を、暖かい眼で描写している。このような対象にも詩情が宿るといふことの発見は大きい。

追ひつけぬ夢の背中や春深し

佐橋 敏子

四月の本部句会でこの句を見たときは、やはり今回の震災と重なった。しかし改めて見ると、一つの事件を越えたものと根元的なものを詠んだ句に思えて来た。

「追ひつけぬ夢の背中」には男女の愛憎が分かち難く漂っている。それは儂く細い一すじの縁で辛うじて結ばれているのだ。この上五中七から受ける印象は暗く深いが、表現は詩の一節のようにたおやかだ。

菓子つつむ薄紙春を惜しみけり

橋本 リエ

この「薄紙」には存在感がある。銘菓と呼ばれている菓子だろう。味も名に勝る深みがある。例えば参上した家で頂いた菓子、という見方もある。そっと置かれた菓子を包む和紙。そこに作者は詩情を感じたのだ。惜春の情だ。

春愁の胸三寸に漂へり

青柳 雅子

作者は、恒例となった「久保田万太郎研究会」で、今年は「万太郎と鎌倉」という労作を発表した。よく知られた瑞泉寺境内のへいつぬれし松の根方ぞ春しぐれ 万の句碑の写真や、資料としての久保田先生の「年譜」、「上演・演出年表」、「著作年表」などのコピー。更に『流寓抄』をテキスト用として

一冊にまとめている。何れも貴重な読み物であり、まさに労作だ。

掲出句、「春愁」という哀愁と、「胸三寸」という胆力の効いた言葉の響きが、一句の中で不思議に溶け合い、一読記憶に残る作品となっている。

集団の土葬マフラー深くせり

諸岡 孝子

東日本大震災の被災地の一つ気仙沼については前号で触れた。作者もその地で被災したお一人。幸い春燈会員の皆さんは罹災には遭ったが全員ご無事とのこと、喜ばしい限りだ。また新しく「春燈沙羅の会」を結成、「春燈」発展の礎の一つとして期待が持てる。

今回の災害を詠んだ句は多いが、何れもテレビや新聞の又聞き域を出ていない。そういう中であって、作者の眼で見心で感じた句として、この句には真実味がある。

撓みつつ余花を支ふる小枝かな

太田佳代子

観察の鋭い句だ。残花余花を詠んだ句は多いが、この句のようにその花を支えて、桜を桜たらしめている「枝」を詠んだ句はめずらしい。その小枝、更にはそれらを支えている幹は人の視線の外にある。然しそれなくして桜はあり得ない。理屈に走らず、しかも内容のある佳句だ。